

泉靖一『濟州島』が示す濟州島研究の意義と課題

伊地知紀子*

<차례>

- I.はじめに
- II. 植民地へのまなざしと濟州島の生活律
- III. 濟州島をめぐるマクロな社會変化とミクロな生活変容
- IV. まとめ—泉靖一濟州島研究が提示する課題

일문요약

既存の濟州島研究のなかで、泉靖一の『濟州島』を、日本で初めて出版された包括的な研究書として多くの研究者が参照し参考にしてきた。もちろん、泉靖一の濟州島研究を可能にする背景に、日本による朝鮮の植民地支配があったことを看過することはできない。

植民地期という時代の文脈のなかに泉靖一の研究成果を位置づけ批判することは従來の議論のなかですでに進められており、本稿でこの点について改めて取り上げることはしない。

本稿では、植民地期でありながらも調査対象との非對称な關係を越える姿勢を隨所に示している『濟州島』をとおして、今後私たちが濟州島研究を實踐するにあたっての意義と課題を次の二点から考察するものである。まず第1点目として、泉靖一の記述を植民地期に蓄積されてきた濟州島研究のなかで捉え直すことによって、その獨自性を提示する。第2点目として、日帝時代以降の濟州島に

* 愛媛大學 法文學部 人文學科 准教授

生じた生活変容および在日濟州島人研究への先見性について言及する。そのうえで、泉靖一濟州島研究が私たちに与えた課題について述べよう。

Key Words : 濟州島, 泉靖一, 『濟州島』, 植民地支配, 調査者の姿勢, 日常生活へのマクロ分析, 他者理解の可能性, 在日濟州島人

I. はじめに

近年、濟州島を主題とする人文社會科學系の研究書籍は日本でも徐々に増えている¹⁾。書籍の他に、日本で刊行された論文、報告書、韓国で発行された書籍の日本語翻譯なども含めるとかなりの数になる²⁾。これら濟州島

1) 例えば、高野史男、『韓国濟州島』, 中公新書, 1996. 高鮮徽, 1996 『在日濟州島出身者の生活過程－關東地方を中心に』, 新幹社, 1996および『20世紀の滯日濟州島人－その生活過程と意識』, 明石書店, 1999. 杉原達, 『越境する民－近代大阪の朝鮮人史研究』, 新幹社, 1998. 伊地知紀子, 『生活世界の創造と實踐－韓国・濟州島の生活誌から』, 御茶の水書房, 2000. 李善愛, 『海を越える濟州島の海女－海の資源をめぐる女のたたかい』, 明石書店, 2001. 文京洙, 『濟州島現代史－公共圏の死滅と再生』, 新幹社, 2005および『濟州島四・三事件－「島のくに」の死と再生の物語』, 平凡社, 2008.

2) 耽羅研究會発行の『濟州島』第5号には、金榮敦・申幸澈・姜榮峯『解放後の濟州島研究概観－語文學・民俗分野』が41-60ページに論文が掲載されており、本報告ではこれを参照した。しかし、本論文は、もともと耽羅文化研究所主催により1945年以後の濟州島研究の流れを總体的に概観する企畫として『耽羅文化』第1号(1982)の185-237ページに連載されたものを翻譯しており、歴史・考古分野については『耽羅文化』第2号、10号、11号、13号、14号、16号に掲載され、耽羅研究會會報『耽羅研究通信』(第8号～17号)に翻譯文が掲載された。自然科學分野は、『耽羅文化』第4号(1985)の271-427ページに掲載されている。なお、耽羅研究會『濟州島』第5号には、他に梁聖宗『日本における濟州島研究の現況』が21-39ページにおいて解放前から1992年までの研究が紹介されている。また、金鐘旻(安榮植譯)『「濟州島學」はどこまで来たか』(原文は『濟民日報』1991年6月1日掲載)を61-66ページにも掲載している。

研究のなかで、泉靖一の『濟州島』を、日本で初めて出版された包括的な研究書として多くの研究者が参照し参考にしてきた³⁾。もちろん、泉靖一の濟州島研究を可能にする背景に、日本による朝鮮の植民地支配があったことを看過することはできない。本稿は、泉靖一による濟州島研究の意義を考察するにあたって、植民地支配と人類學の問題を主題にするものではない⁴⁾。しかし、植民地期に宗主國の人間として特權的な立場になった日本人研究者である泉靖一が遺した成果を論じるにあたって、予め以下の二点を述べておきたい。

まず第一に、全京秀が述べているように、植民地期に収集された資料および報告書が統治目的のために作成されたものであることをもって、その存在を全面的に否定することはできないということである⁵⁾。つまり、これら調査

3) 私は、1992年5月から大阪市生野區および東成區という日本最大の在日コリアン居住地域で在日1世の女性へ口述生活史法による調査を始めた。そのなかで、指定したわけではなかったが、インタビューイの90%が濟州島出身者であったことから、この人びとについての参考文献として泉靖一の『濟州島』に出會ったのである。泉靖一が濟州島を初めて訪れたのは1935年、フィールドワークは1936年から1937年であった。ちょうどその頃、濟州島から大阪への渡航者が増加し渡航制限を受けた後であり、すでに島民の5分の1が日本に居住していた(杉原 1998, 伊地知・村上 2008)。私が大阪で出會った在日濟州島人の女性たちは、みなこの時期に渡日し、濟州島での生活そして渡日後の人生を語ったのである。私自身もまた、1994年7月から濟州島でのフィールドワークを開始し、現在にいたるまでを振り返るなかで、泉靖一が遺した濟州島研究の分量そのものは多くはないが、そこから現在の私たちが學びうる知見があちこちに見いだせると考えたのである。

4) 植民地支配と人類學を取り上げた研究としては以下を参照のこと。崔吉城編、『日本植民地と文化変容－韓国・巨文島』、御茶の水書房、1994。中生勝美、『民俗研究所の組織と活動－戦時中の日本民族學』、『民族學研究』、62巻1号、1997および中生勝美編、『植民地人類學の展望』、風響社、2000。山路勝彦・田中雅一編、『植民地主義と人類學』、關西學院大學出版會、2002および山路勝彦、『近代日本の植民地博覽會』、風響社、2004。全京秀(岡田浩樹・陳大哲譯)『韓國人類學の百年』、風響社、2004。竹澤泰子、『人種概念の普遍性を問う－西洋的パラダイムを超えて』、人文書院、2005。

5) 全京秀、前掲書、64ページ。

結果のなかに「植民地主義のイデオロギーに回収されない様々な知的発見があったことも確か」だといえよう⁶⁾。そこで、個々の植民地期資料を対象にするにあたっては、資料収集の方法、分析視角、言説編成などについて多角的な検討・検証が課題となってくる。こうした課題のなかで、本稿と関連するものとして第二に述べておきたいことは、調査研究における他者認識の問題である。これは、植民地支配にかかる自他認識という時代限定的な問いだけにとどまるものではない。サイードの『オリエンタリズム』、そしてマーカス&フィッシャーの『文化を書く』においてすでに、研究者からの異文化へのまなざしの問題、研究者と対象者の非対称的な関係性などが指摘されているように、ポストコロニアル社会における調査研究のあり方にも向けられているのである。

泉靖一は、確かに植民地宗主國の人類學者として濟州島を調査研究した。しかし、植民地期の濟州島、そして解放後の在日濟州島人社會への調査をまとめた『濟州島』をとおして読み取れることは、泉靖一が濟州島社會をマクロな歴史變化のダイナミズムのなかに位置づけ、当該社會で生きる人びとの視点からその變化を捉えようとした姿勢である。これは、サイードやマーカス&フィッシャーによって崖っぷちに立たされたフィールドワークの危機を打開する、ある意味で素朴な調査姿勢だったのである。泉靖一のとった調査姿勢には、「とびこむ」、「近づく」というフィールドワークの基本の次の段階として、「相手の立場にたつ」という段階を提示した岩田慶治の議論⁷⁾の萌芽が見て取れるともいえるのではないだろうか。岩田は、フィールドワークに潜む調査者と非調査者との非対称な關係性を編み直す地平を構想したのであ

6) 坂野徹、『帝國日本と人類學者 1884年—1952年』、勁草書房、2005、5ページ。

7) 岩田慶治、『創造人類學入門—《地》の折返し地点—』、小學館創造選書、1982、44—48ページ。

る。もちろん、泉靖一にこうした可能性を見いだしたからといって、植民地統治にかかる研究者としての歴史的責任から逃れられるわけではないことはいうまでもない。

植民地期という時代の文脈のなかに泉靖一の研究成果を位置づけ批判することは従來の議論のなかですでに進められており、本稿でこの点について改めて取り上げることはしない。本稿では、植民地期でありながらも調査対象との非対称な関係を越える姿勢を隨所に示している『濟州島』をとおし、今後私たちが濟州島研究を實踐するにあたっての意義と課題を次の二点から考察するものである。まず第1点目として、泉靖一の記述を植民地期に蓄積されてきた濟州島研究のなかで捉え直すことによって、その獨自性を提示する。第2点目として、日帝時代以降の濟州島に生じた生活変容および在日濟州島人研究への先見性について言及する。そのうえで、泉靖一濟州島研究が私たちに与えた課題について述べよう。

II. 植民地へのまなざしと濟州島の生活律

1. 日帝下の濟州島言説

濟州島が近代人文社會科學の分析対象となり、自然・生業・慣習・人間などが詳細に分類・調査され記述されるようになったのは、日本の植民地支配の過程においてである。日本による植民地支配のなかで、濟州島は朝鮮の辺境として、また朝鮮文化との偏差が特異な「地方」として位置づけられアカデミックに記述された。こうした植民地研究における濟州島への視線は、解放後濟州島の内部にも引き継がれる。濟州島についての総合的な植民地文書を最初に記したのは、善生永助である。善生自身、早稻田大

學で社會學・人類學・民俗學を体系的に學んでおり、彼のように總督府に雇用された人びとによる民俗學調査を全京秀は『官房民俗學』と呼び、これを含めた1930年代の民俗學を、秋葉隆を代表とした京城帝國大學中心の『講壇民俗學』と李能和をはじめとする韓國人學者による『在野民俗學』の3つに分類している。しかし、3分類を『アカテイズムの形成というレベルで眺めるならば、講壇と官房は日本人中心の官主導により『与えられたもの』である⁸⁾。この点から濟州島を総合的に記述した植民地文書と泉靖一の記述は、比較検討に値するといえよう。

植民地文書では、朝鮮における辺境性、資本主義市場經濟からみた困窮性、粗野な生活技術、女性の經濟力などが濟州島の特殊性としてクローズアップされていった。例えば、朝鮮總督府の囑託として調査を行った善生永助は、詳細な調査項目を立てて濟州島を記述した。その資料『生活狀態調査(其二)』のなかで善生は濟州島を調査するにあたって「李朝時代になっても、中央政府の威令充分に及ばざる爲め、島内に屢々反亂の蜂起した例もあり、従って民心の傾向にも自ら特異なところがある」と述べている⁹⁾。ここでは、濟州島の歴史や生活世界の獨自性は無視され、朝鮮のなかの『特殊』な部分と見なされる。

こうした濟州島への視線は、1937年と1939年に濟州島廳から刊行された『濟州島勢要覽』においても踏襲された。どちらの要覽においても、濟州島は「同じ朝鮮」のなかでも陸地と比較され、「女がよく働く」ことが指摘される。また、陸地に比べて「島民の生活程度は慨して低く」、濟州島は「海に無限の宝库を藏し陸に廣漠たる未開の耕地を有するも古來一般に漁業幼稚にして徒に通漁船の活躍を拱手傍觀し農耕亦粗放の慣習に甘んじ、資力

8) 全京秀, 前掲書, 67-68ページ。

9) 善生永助, 『生活狀態調査(其二)濟州島』, 朝鮮總督府, 1929, 2ページ。

概ね低く企業興らず自然産業の不振を招集せる結果、必然經濟緩和を島外に求めんとする傾向生じ、殊に本島交通の狀態改善に伴はれ出稼は一般島民に多大の關心を呼び年と共に出稼の風盛んとなり¹⁰⁾と記述し、日本への出稼ぎの原因は濟州島での生活が「幼稚」「未開」「粗放」であることに還元されてしまう。同様の記述は、全羅南道警察部長の鳥山進は雑誌『朝鮮』に掲載した「濟州島の現地報告」にも見られる。鳥山は、「本島は海陸の交通不便なる關係上、文化の程度低級にして一般島民の生活程度陸地に比し低く、衛生思想亦幼稚なり」と記した¹¹⁾。こうした後進言説が植民地文書における濟州島言説の特徴の一つである。

これに對して泉靖一は濟州島民の視点を考慮した記述をしている。植民地期、「資源の宝庫」として開發されていく濟州島の生活について、泉靖一は漁港の整備にふれながら「以上濟州島民の生活上見過ごすべからざる事實は、これら諸港が、土地の住民によって直接利用されることはすくなく、日本の大資本下における漁業者にのみおおく利用されていたことにある。島民として恩恵に浴する部分は、いうまでもなく、これらの港から出稼ぎの人々が陸地や日本に送りだされたり、海産物が積みだされはしたが、それが本島の産業の開發に直接役立ったとは思われない」と述べている¹²⁾。開發とは、あくまでも植民地支配側にとってのものであり、そこで生きる人間が培ってきた

10) 濟州島廳,『濟州島勢要覽』,1937,18-19ページおよび濟州島廳,『濟州島勢要覽』,1939,11-12ページ。

11) 鳥山進,「濟州島の現地報告」,『朝鮮』,8月号,第303号,朝鮮總督府,1940,28ページ。

12) 泉靖一,『濟州島』,東京大學出版會,1966,63ページ。また、日帝下での濟州島の生活と出稼ぎについては、1933年から1935年にかけて朝鮮總督府の委託を受けて調査した地理學者柘田一二も論文を發表している。柘田は數量データも用い出稼ぎの動向を示したが、その記述からは濟州島民が出稼ぎにでる内的要因への洞察はない。泉靖一と柘田一二の研究の比較検討については、今後の課題としたい。

生活技法は無視されていく。このことを考慮した泉靖一のような例は少なく、当時、濟州島に向けられた視線は、外部から「遅れた」濟州島を有効利用できるように改造していく目論みを孕んでいるものが圧倒的に優勢であった。

2. 濟州島の生活論理へ

泉靖一による濟州島で生活する人々の視点にたった記述は、『濟州島』の他の箇所でも見受けられる。例えば、裸潛漁場における慣行の説明のなかで馬尾草の重要性を指摘している¹³⁾。これは、特に海村における肥料としての馬尾草へ着目した記述¹⁴⁾と関連するものであり、馬尾草から濟州島の生活のあり方を考察しているものである。付言すると、私もまた馬尾草が山・陽村との物々交換において重要な品物であったことを調査のなかで聞いたことがある。現在ではチャムスが海洋文化において濟州島を象徴する存在として取り上げられるが、泉靖一は生業や宗教などの調査をととして「濟州島の潜水作業は農耕生活の一環と考えられる」と述べた¹⁵⁾。このような濟州島の生活文化に寄り添った分析は、『礪磨集団』の記述において最も詳細に展開されている¹⁶⁾。泉靖一の記述を読むと、この礪磨集団がいかに濟州島の生活の必要にもとづいたルールで運営されているかが理解できる。ここに見られる共同性形成のシステムは、牧畜労働に関する記述のなかで「社會保障的な意味」¹⁷⁾という表現が採用されていることから、濟州島にお

13) 泉靖一、前掲書、115-116ページおよび120ページ。

14) 泉靖一、前掲書、85ページ。

15) 泉靖一、前掲書、137ページ。

16) 泉靖一、前掲書、160-168ページ。

17) 泉靖一、前掲書、99ページ。

いて機能的な生活律があることを示すものである。『濟州島』が日帝時代の調査結果を敗戦後にまとめたという時間的問題はあるが、こうした濟州島の生活論理を尊重する視点というのが、泉靖一濟州島研究のエッセンスではないかと考える。また、日本と濟州島との関連性についても慎重であることが指摘されており、朝鮮半島やモンゴルおよび雲南と比較することによって、日帝期における鳥居龍藏とは異なり濟州島文化への相対的獨自性を提示している¹⁸⁾。

Ⅲ. 濟州島をめぐるマクロな社會変化とミクロな生活変容

1. 日帝時代以降の濟州島における生活変容

泉靖一『濟州島』のなかで、先述したミクロな視点から濟州島をとらえる側面とは別にマクロな視点から社會文化の変容を捉えた記述が見られる。これは、第2部「東京における濟州島人」および第3部「濟州島における三十年」への記述に繋がるものである。

泉靖一は、自然環境や神話における文化的相対性を記述する一方で、日帝時代に生じた生活変化が植民地支配のなかで形成されてきたものであることを指摘している。例えば、資本主義市場經濟の導入と村の移動について「1900年ころから約15年の間」¹⁹⁾とし「海産物の販路の擴張から『家族

18) 泉靖一, 前掲書, 29-32ページ. 石宙明は、『濟州島隨筆-濟州島の自然と文化』(1968)225ページのなかで、鳥居龍藏が、1914年濟州島で行った講演とその内容を「(1)本島人は血統の神話、容貌、骨格及氣質をみると半日本人であり、(2)日本古事記に出てくる常世(夏)國は本島であると推定され、(3)牧畜の方法其他をみると蒙古の牧畜業者の渡來を確証することができる」と紹介している。

19) 泉靖一, 前掲書, 41ページ.

の向海移動期』が起り、移徒する者が續出した」²⁰⁾と述べた。また、末子相續と日本への出稼ぎが重なるなかでの世帯人口の減少を指摘している²¹⁾。これに關しては、さらに陸地から自由労働者が流れてくることによる馬への需要が人に回され、馬の監視を委託されていた山・陽村と海村との關係の変化も指摘している²²⁾。ただ、ここでは陸地に自由労働者がなぜ生じたのかについての言及はない。陽村・山村・海村の順に上下がつけられていた階層意識にたいする変化については、「家族の向海移動期」前後で逆轉したとし、その理由として海村人の經濟力を指摘し²³⁾、海村の男子に「なんで山の人間を嫁にもらうのか、海にもはいれない女を」という考えが優勢となったと述べている²⁴⁾。このほかにも、生活道具に關しては、漁業で使用する網を「大阪で購入」²⁵⁾、民具の章では「護謨鞋、地下足袋」は「大阪からの直輸入」、食膳も「大阪で作られた數人で使用できる円形のもの」²⁶⁾があることにふれている。これら道具だけでなく、人間關係についても「超家族集團の研究」において「親族關係が移動の通路となることもあるから、親族の機能は地域の制約を排して、ときには本土から日本にまでおよぶ」²⁷⁾と社會変化について空間的廣がり視野に入れている。

泉靖一が濟州島における植民地支配の影響をその日常生活のなかで見いだした点は、人類學がかつて行っていた、對象社會を「自己完結的な小

20) 泉靖一、前掲書、43ページ。

21) 泉靖一、前掲書、74-78ページ。

22) 泉靖一、前掲書、87および98ページ。

23) 泉靖一、前掲書、42ページ。

24) 泉靖一、前掲書、101ページ。

25) 泉靖一、前掲書、104ページ。

26) 泉靖一、前掲書、217ページ。

27) 泉靖一、前掲書、143ページ。

社会』として捉えるのではなく、同時代の世界システムのなかにフィールドを定位する²⁸⁾という、1980年代半ばに最も問題化された対象記述の方法論においてもその萌芽の意味があったのではないだろうか。植民地支配によってもたらされた支配＝都市／被支配＝村という関係性は、世界各地で生み出された構造であり、これに基づいた移動経験は各被植民地において解放後完全に消失することなく、ポストコロニアルな問題として報告が続いている。こうしたポストコロニアル研究において日本人による日本の植民地主義への接近が乏しいことが、日本の人類学の特徴であった²⁹⁾。そのなかで日本の植民地主義に関する人類学による研究が公刊されるようになるのは、日本では1990年代以降となる。

2. 在日濟州島研究への先駆性

日帝時代に生じた濟州島における生活変容に触れたことが、敗戦後泉靖一を在日濟州島人研究へと向かわせた。1950年泉靖一は東京X地区の濟州島人のうち250世帯に面接調査を実施した。その理由として、泉靖一は「日本の大都市に居住する濟州島人は、玄海灘の荒海に孤立させられていた彼らの文化を、めまぐるしい都市生活のただなかで、異質的な日本文化に接触させねばならなかった。そこにはいうまでもなく、文化の都市化(urbanization)と変容(acculturation)とが同時に平行して生じたのである」と述べ、「もろもろの政治情勢が逼迫」したため調査を中止し資料上の欠陥を認めながらも、「これまでわが國の文化人類学者のなかで、この種の研究

28) 松田素二、『抵抗する都市—ナイロビ 移民の世界から』、岩波書店、1999、6-8ページ。

29) 山路勝彦・田中雅一編、『植民地主義と人類学』、關西學院大學出版會、2002、30ページ。

がほとんどなされていなかったので、おおかたの批判をあおぎたかったからである」と述懐している³⁰⁾。

こうした在日済州島人についての生活調査への必要性の主張は、在日コリアンに関する研究のなかで先見性を示すものであったといえよう。なぜなら、戦後、在日コリアンは「一時的滞在者」として政治問題扱いをされ、1970年代からは「定住」をめぐる社会問題が論じられ、在日コリアンを一枚岩として論じてきたからである。政治問題的視点も社会問題的視点も「在日朝鮮人問題」として在日コリアンを論じてきたが、1990年代に入り「国際化」時代における「内なる他者」として、「学問」の領域でも「エスニシティ」研究の対象として取り上げられるようになった。つまり、20世紀末にきて在日コリアンは日本国内の少数民族として分析の対象となったのである。こうした研究傾向は、21世紀前後から、在日コリアンの「アイデンティティの多様化」をテーマとする研究となって現れた。「世代交代」「国際結婚の増加」「ダブル」などがタイトルとなり、民族的アイデンティティの行方が論じられている。これらの研究は、在日コリアンを一枚岩として論じてきた既存研究の視点を検証するうえでは一定の意味があった。それまでの在日コリアン言説には2パターンあり、差別や排除の対象である受動的存在(非差別者)として記述するもの、差別や排除と闘う能動的存在(運動体)として記述するものどちらかに集約されがちであった。在日コリアンの多様性を論じる研究は、こうしたパターンへ異議を唱えるものとして評価できるが、限界もある。それは、既存の在日コリアン研究が在日コリアンを日本国家の枠内にある存在として捉え、朝鮮半島との関係を論外に置いているということである。近年の研究では、在日コリアンと朝鮮半島との関係を視野に入れ、かつ先述した2つのパターンと

30) 泉靖一、前掲書、235ページ。

は異なる視点として、常に非差別者でもなく、また常に運動者でもない(時にどちらでもある)、泉靖一が取り上げた日常生活への研究が始まるのは1980年代末からあるが、在日濟州島人については1990年代後半からとなる³¹⁾。

IV. まとめ—泉靖一濟州島研究が提示する課題

最後に、泉靖一『濟州島』をとおして提示された今後の濟州島研究への課題について述べてみたい。まず、第1点目として述べた、解放前の調査をとおして泉靖一が提示した濟州島の生活論理を尊重する視点は、解放後の濟州島研究においてどのように見いだすことができるだろうか。これについて、私が『濟州島』を始めとして不十分ながらも既存の濟州島研究を學ぶなかで得られた知見から述べてみよう。

「解放後、濟州島に關する學問的な研究がさかんになり始めたのは6・25からだといえよう」と述べられているように、解放後の濟州島研究は1950年代に始まる³²⁾。1959年に島外から濟州島總合學術調査団が訪れ、「濟州島の學術資源の珍重性が再認識されていった」³³⁾。その後、巫俗・言語・チャムス・家族・親族に始まり、多様な人文社會科學系の研究成果が蓄積されてきた。こうした解放後の濟州島研究において、私は大きく分けて二つの特

31) 1990年代以降の在日濟州島人に關する研究としては以下を参照のこと。高鮮徽、『在日濟州島出身者の生活過程—關東地方を中心に』、新幹社、1996。および『20世紀の滯日濟州島人—その生活過程と意識』、明石書店、1999。杉原達、『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』、新幹社、1998。伊地知紀子、『生活世界の創造と實踐—韓國・濟州島の生活誌から』、御茶の水書房、2000。

32) 金榮敦・申幸澈・姜榮峯、『解放後の濟州島研究概觀—語文學・民俗分野』、耽羅研究會、『濟州島』、第5号、新幹社、1992、41-60ページ。

33) 金榮敦・申幸澈・姜榮峯、前掲書、43ページ。

徴が見いだせるのではないかと考える。一つは、日帝時代の植民地研究者によって固定化された濟州島文化周辺論＝韓國文化の亞流あるいは周辺・辺境というものである。もう一つは、1980年代以降に提示されるようになる實體論＝濟州島文化は獨自の本質を持つと考えるものである。本稿は、こうした濟州島研究全体の動向を論じるものではないので、これ以上詳細な言及は控える。しかし、濟州島文化を捉える視線のなかで、眞か偽か、変化への適応か不適応か、あるいは濟州島のか否かという二文法的な分析法ではなく、社會的政治的な歴史變動のなかで濟州島の生活世界を島民の視線から捉えることが今後さらに必要となってくるのではないだろうか³⁴⁾。

この点において、泉靖一の遺した『濟州島』のなかで示されたマクロな社會變動のなかでミクロな生活変化を捉える視点は、あらためて私たちに今後の方向性を示すものといえるのではないだろうか。もちろん、私も『濟州島』における記述に全面的に同意追隨するわけではない。例えば、泉靖一は、先述した碾磨集団が担ってきた機能は近代化のなかで崩壊するというだろうという結論を下している³⁵⁾。しかし、私は碾磨集団が担ってきた「契」と「スラム」の機能について、近代化の波を受けながらも解放後の社會変化のなかで再構成されてきたプロセスを調査した³⁶⁾。

他に、泉靖一は「クェンダン」について「意味不明」³⁷⁾としたままである。これは、時代の制約によって繼續調査が不可能となったためであろう。こうし

34) 濟州島文化の生成について生活世界に視点を置いたものとして以下を参照のこと。金昌民、1995『韓國人類學叢書 6 환금작물과 제주농민문화』, 집문단, 1995. 伊地知紀子, 前掲書。

35) 泉靖一, 前掲書, 167-168ページ。

36) 伊地知紀子, 「生活共同原理の混淆と創造—韓國・濟州島の生活實踐から—」, 『文化人類學』, 69巻 2号, 日本文化人類學會, 2004, 292-310ページ。

37) 泉靖一, 前掲書, 143ページ。

た親族集団については、第2部の在日濟州島人の住居形態のなかで、姻戚親族の同居について疑問を呈しており、親族関係について本書のあちこちで濟州島の生活を考察するにあたって関心をいただいていたようである。この「クエンダン」については、私も関心を持ち続けているが、従來の濟州島研究の記述のなかではこれをベースにした宗教、農村あるいは海村の生業集団、相互扶助などをメインテーマとした分析としてまだ十分に研究が蓄積されていないように見受けた。また、濟州島の生活文化について調査するなかで、「クエンダン」も含め、親族ネットワークを女性側に重心を置いて考察する必要があると感じている。なぜなら、冠婚葬祭における儀礼の準備および運営、賃金労働へのアクセス、スヌルムの成立、出稼ぎチャンスの獲得など、父系を中心とする儒教的な親族観では見えにくいネットワーク(異なる父方親族に属する女性同士が母方親族で繋がっているケースやチャムス同士あるいは「人婦」労働に出る者同士など)が、人々の生活を維持していることをフィールドワークのなかで見てきたからである。つまり、非常に雑駁に述べれば既存研究は男性側の視点からの分析が多数であり、泉靖一がわざわざ設けた「島の女性」という視点にたった既存研究の捉え直しが進められるとより興味深いのではないだろうか。

さらに、在日濟州島人研究については、あくまでも当時の文化人類學調査として行ったものであるがゆえに、在日コリアンに関する法制度や政治的背景についての分析へ限界が生ずる。東京X地域の濟州島人は「母村の村落組織をこの地にまで持ち込んでいない」³⁸⁾と述べているが、ちょうど1949年に日本政府が施行した治安彈壓立法である団体等規制令により濟州島の村単位の在日親睦會もこの時期解散したものが³⁹⁾ある。こうした日本政府

38) 泉靖一、前掲書、240ページ。

39) 私のメインフィールドである杏源里出身者による「在日本杏源里親睦會」もこの時期解

の在日コリアン政策との関係性などは、近年日本の社会学および文化人類学の研究では少しずつその成果が蓄積されてきている。また、1965年の調査による第三部『濟州島における三十年』においても、この時期調査したものとして解放後の4・3事件および日本との関わりについて言及されている点においては十分評価すべきであるが、調査期間が短いこともあり情報の整理という段階で留まってしまったことは残念であったといえる。今後、濟州大に在日濟州人センターが開設されることもあり、在日濟州島人の生活世界について、日韓の近現代史におけるマクロな社会変動のなかでミクロな生活変化から捉えた泉靖一の視点を十分検討したうえで、これをさらに継承発展させていくことが求められているのではないだろうか。実際、在日濟州島人の移動経験だけを捉えても、国家史あるいは民族史の枠組みでは収まらず、濟州島に対する外部からの辺境視を覆す内容を含んでいる。これらも合わせ、濟州島における近代という経験は従来の民族観・歴史観・国家観を再考し、新たな世界観を創造する可能性を普遍的なものとして提示しているのではないかと考える。泉靖一の濟州島研究は21世紀を生きる私たちへ多様な示唆を遺したのである。

<謝辞>

本報告は、2010年度科学研究費補助金(基盤研究(B))『在日コリアンの労働世界に関する実証的研究—「國境をまたぐ生活圏」の形成と変容』(課題番号:21330119、代表:伊地知紀子)および(基盤研究(A))『新自由主義の時代における生活世界が生成する新たな共同性に關する生活人類学的研究』(課題番号:21242033、代表:松田素二)の助成をうけた成果の一部でもある。

散した。

참고 문헌

- 崔吉城編, 『日本植民地と文化変容－韓國・巨文島』, 御茶の水書房, 1994.
- 濟州島廳, 『濟州島勢要覽』, 1937.
- , 『濟州島勢要覽』, 1939.
- 全京秀, (岡田浩樹・陳大哲譯), 『韓國人類學の百年』, 風響社, 2004.
- 泉靖一, 『濟州島』, 東京大學出版會, 1966.
- 伊地知紀子, 『生活世界の創造と實踐－韓國・濟州島の生活誌から』, 御茶の水書房, 2000.
- , 『生活共同原理の混淆と創造－韓國・濟州島の生活實踐から－』, 日本文化人類學會, 『文化人類學』, 69卷, 2号, 2004, 292~310ページ.
- , 『定住と非定住の位相－濟州島からの移動／濟州島への移動とともに－』, 大阪市立大學社會學會, 『市大社會學』, No. 8, 2007, 1~16ページ.
- 伊地知紀子・村上尚子, 『解放直後・濟州島の人びとの移動と生活史－在日濟州島出身者の語りから』, 蘭信三編, 『日本帝國をめぐる人口移動の國際社會學』, 不二出版, 2008, 87~145ページ.
- 岩田慶治, 『創造人類學入門－《地》の折返し地点－』, 小學館創造選書, 1982.
- 金昌民, 『韓國人類學叢書6 환금작물과 제주농민문화』, 집문당, 1995.
- 金榮敦・申幸澈・姜榮峯, 『解放後の濟州島研究概觀－語文學・民俗分野』, 耽羅研究會, 『濟州島』, 第5号, 新幹社, 1992, 41~60.
- 高鮮徽 『在日濟州島出身者の生活過程－關東地方を中心に』, 新幹社, 1996.
- , 『20世紀の滯日濟州島人－その生活過程と意識』, 明石書店, 1999.
- 李善愛, 『海を越える濟州島の海女－海の資源をめぐる女のたたかい』, 明石書店, 2001.
- 榊田一二, 『榊田一二地理學論文集』, 弘詢社, 1976.
- 松田素二, 『抵抗する都市－ナイロビ 移民の世界から』 岩波書店, 1999.
- 文京洙, 『濟州島現代史－公共圏の死滅と再生』, 新幹社, 2005.
- , 『濟州島四・三事件－「島のくに」の死と再生の物語』, 平凡社, 2008.
- 中生勝美, 『民俗研究所の組織と活動－戦時中の日本民族學』, 『民族學研究』, 62卷, 1号, 1997.

- 中生勝美編, 『植民地人類學の展望』, 風響社, 2000.
- 坂野徹, 『帝國日本と人類學者 1884年—1952年』, 勁草書房, 2005.
- 石宙明, 『제주도수필 제주도의 자연과 인문』, 實晋齋, 1968.
- 杉原達, 『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』, 新幹社, 1998.
- 高野史男, 『韓國濟州島』, 中公新書, 1996.
- 竹澤泰子, 『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』, 人文書院, 2005.
- 鳥山進, 『濟州島の現地報告』, 『朝鮮』, 8月号, 第303号, 朝鮮總督府, 1940.
- 山路勝彦・田中雅一編, 『植民地主義と人類學』, 關西學院大學出版會, 2000.
- 山路勝彦, 『近代日本の植民地博覽會』 風響社, 2004.
- 善生永助, 『生活狀態調査(其二)濟州島』, 朝鮮總督府, 1929.

Abstract

The Meanings and Issues of Research about Jeju Island
suggested by IZUMI Seiichi ‘Jejudo’

Ijichi Noriko*

A lot of researchers refer ‘Jejudo’ written by IZUMI Seiichi as an inclusive research book published for the first time in Japan. Of course, we can’t overlook the fact that IZUMI Seiichi could research the Jeju island and write ‘Jejudo’ because of the colonialization of Korean peninsula by Japan.

It has already been advanced to locate and to criticize the study results of IZUMI Seiichi in the context of the colonial researches, so I don’t take up this respect again by this paper. I focus on the style and the perspective of ‘Jejudo’ which shows some possibility to reconstruct the relationship between the researcher and the object of research under the colonialism. So I consider the next two points of view about the meaning and problem for us to research the Jeju island.

For the first, I suggest the originality of the descriptions by IZUMI Seiichi in the context of the colonial researches about Jeju island. For the second, I refer to the foresight to research about the life changes about the Jeju island and Jeju people in Japan since the colonialization of Korean peninsula by Japan. Through these two points I describe the problem that ‘Jejudo’ written by IZUMI Seiichi has given us.

* Associate Professor, The Department of Humanities, Faculty of Law and Letters, Ehime University

Key Words

Jeju Island, IZUMI Seiichi, 'Jejudo', Colonial rule, Researcher's Position, Micro analysis about everyday life, Possibility toward understanding of others, Jeju people in Japan

교신 : 伊地知紀子 日本 愛媛縣松山市文京町 3 番
愛媛大學法文學部人文學科
(E-mail : ijichin@ea.mbn.or.jp)

논문투고일 2011. 01. 23.

심사완료일 2011. 02. 09.

계재확정일 2011. 02. 20.